

☒ 話すこと ☒ 書くこと☒ 個に応じた教材の作成や指導の充実
☒ パフォーマンステストでの活用☒ 授業での活用
☐ 課外活動での活用☒ 家庭学習での活用実践の
ポイント

AIの活用による発話量の増加・記述内容の深化、及び言語活動の充実に向けた授業改善

実証概要

<校数>10校(小学校:2校、中学校:4校、義務教育学校1校、高等学校3校)

<人数>3,164名(小学校:479名、中学校:1,713名、義務教育学校:129、高等学校:843名)

<学年>小学校:第5、6学年、中学校:第1、2、3学年、高等学校:2年 <アプリ等> BASE in OSAKA(株式会社サインウェーブ)

<AI機能について>

- ・音声機能により、英語での発話を音声合成及び点数化
- ・英作文を文法や構成などの観点で即時添削
- ・スピーキングやリーディングについてのパフォーマンステストのAI採点

中学校におけるAIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●英作文機能を活用し、内容を深める

「特定のトピックについて、海外の学校とオンライン交流を行う」という言語活動に向けて、内容を深めるために英作文機能を活用。個人やペアでのやりとり等を通して、各自でまとまりのある英文を作成した後、BASE in OSAKAに入力。AIのフィードバックをもとに、よりよい表現になるよう考えたり、修正したりする生徒の様子が見られた。教員は、内容面でのアドバイスにより注力できるようになった。

●音読機能を活用し、発表練習をする

「クラスメイトに日本文化を紹介する」という言語活動に向けて、各自で作成した英文の発音の確認や表現の幅を広げるために音読機能を活用。個人で発音の確認や練習を行えることで、発表の不安軽減につながるとともに、AIの評価をもとに、よりよい表現に向けて自己調整をしながら何度も練習する様子が見られた。教員は、個人指導や全体へのフィードバックにより多くの時間を割けるようになった。

実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①児童生徒の英語力の変化

・BASE in OSAKAを活用したパフォーマンステスト「話すこと」の検証初期と検証終期のAI評価平均点の比較では、上昇が見られた。

AI評価(平均点)	検証初期 (6月)	検証終期 (12月)
小学校	28.0	43.1
中学校	42.8	47.2
高等学校	30.1	33.7

※100点換算

②児童生徒の関心・意欲の変化

- ・BASE in OSAKAを使うことにより、授業中における自身の発話量、発話時間が増えた。
(小)93.5%(中)82.9%(高)83.5%
(児童生徒アンケートより)
- ・英語学習への心理的ハードルが下がり、楽しんで学習に取り組む様子がみられた。
- ・AIによるフィードバックが即時的に得られることで、繰り返し課題に挑戦するなど、学習に対する粘り強さがみられた。

③教師の指導の変化

- ・AIによる即時フィードバックにより、個別学習中に児童生徒を支援する時間をより多く確保することができた。
85%(教師アンケートより)
- ・AIの評価を参考にすることで、個別の指導やアドバイスの内容が充実した。
- ・AIの評価を使うことで、クラス全体に共通する課題にも気づきやすくなり、指導の充実につながった。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●AIを効果的に活用した言語活動の充実に向けて

目的:日々の授業改善や指導と評価の一体化の推進及び児童生徒の「話すこと」「書くこと」を中心とした英語による発信力の強化

取組み:・AI英語活用協議会(3回):モデル校の取組みについて交流・協議、学識経験者による助言・評価等を行った。

・モデル校公開授業:BASE in OSAKAを活用した授業を行い、事後協議等で協議や情報交換を行いながら研鑽を重ねた。

・大阪府英語教育フォーラム:モデル校(AI英語活用リーダー)による実践報告、学識経験者による指導助言・講演を行った。

・各種研修会:英語コーディネーター連絡会、小学校英語専科指導教員研修会等でAIを活用した実践に係る報告等を実施した。

成果:AI英語活用リーダーによる実践交流や学識経験者からの指導助言をとおり、AIのより効果的な活用に向けた指導改善を行うとともに、積み上げた実践や得られた知見を広く府域に発信し、成果の普及を図ることができた。

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

●言語活動の質を高め、4技能5領域をバランスよく向上→発信力の向上

(成果)・児童生徒の発話量増加 ・発話への意欲の高まり ・教師の児童生徒への支援時間増加

・AIの使用目的を意識した、授業とつながりのある活用

(今後の取組み)・「目的・場面、状況」に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現する英語力の育成に向けた取組みの充実

・授業や家庭学習等におけるAIを効果的に活用した授業等のモデル構築

・英語の発信力向上に必要な英語に触れる機会の創出